

【熊谷ゼミの紹介】

太田享甫（ゼミ長）

I.はじめに

こんにちは、いよいよ次年度からゼミが始まりますね。

みなさんはきっとほとんどの方が就職活動をすると思いますが、その時の鉄板の質問として「あなたが学生時代に努力したことは？」と聞かれることがあるでしょう。

大抵はゼミ、サークル、バイトのどれかを話すのではないのでしょうか。

そして、これは個人的な印象ですが、ほとんどの卒業生が「もっと勉強すれば良かった」と口にします。

幸いにもみなさんは、学生生活において大きな位置を占め、普段の講義よりも実践的に学べるゼミ、その選択の岐路にいます。明確な意志と目標を持って選ぶことを強くおすすめします。

II.ゼミ紹介

1.概要

今年は、男：女=2：3の計5人が在籍しています。

三年次は文献購読、四年次は卒業論文の執筆をします。

夏には1泊2日で夏合宿を行いました。

2.文献購読について

きっと、他のゼミにはない熊谷ゼミの大きな特徴は、この三年次の「文献購読」の量にあるかと思われます。

1～2週間に一冊のペースで文献購読を行い、その文献について報告者が要約と考察を発表し、議論していきます。

これだけ聞くと大変だという印象を受けるかと思いますが、春学期の初めの方は軽めの小説から入っていきます。徐々に専門書も読み進めていきますが、春学期が終わる頃には自分の読書サイクルのようなものができていて、それなりに苦勞なく一週間に一冊ほどは読めてしまうようになります。

事実、少人数でありながら、その出席率は驚くほど高く、春学期はゼミ長である私以外の4人は全て出席していたはずですが。それも、皆が文化系の読書好きというわけではありませんし、バスケ部に所属する子もいれば、教職課程を履修している子、サークルの部長などなど、日々忙しい毎日を送っている子たちばかりです。

やはりこの文献購読の量は最大の特徴である反面、このゼミを忌避する最大の理由ともなると思っていますので、まずは、実際にやってみると案外こなせてしまう、ということを知って欲しいです。

3.おすすりポイント

春学期と秋学期では別々のテーマをあつかいます。また、テーマもその年によって変わります。

今年度の春学期は、主に1960年代末～1970年代の日本、あの学生運動や連合赤軍など、革新的な雰囲気がか巻いていた日本を中心に関連文献を読んでいきました。

ゼミでこの時代について学ぶ前は、当時のあの熱量や団結感ある時代と、現代との繋がりがまったく見えず、自分と彼らとの間にも明確に境界線を引いていました。

しかし、当時の学生、それも渦の中心メンバーから遠巻きまで、あるいは連合赤軍メンバー、政治家、学者など、あらゆる視点からこの時代を、課題文献を通して見つめてみると、自分と彼らにそこまでの違いが無いことや、現代に至るまでの繋がりが見えてくるようになります。

社会を、一本一本の糸がか絡まりあつた複雑な球体のようなものに例えるならば、視点はそれを切る刀のようなものです。球体のままでは複雑でわからないものでも、あらゆる視点を用いて、その断面図を分析すれば、だんだんと全体像が見えていきます。

そして、文献購読だけではなく、実際にゼミで行う議論も非常に重要です。

自分の視点だけでは軸は一本しかありません。しかし、他の視点の軸をさしたとき、それは文字通り、より高次元なものへと変わっていきます。

このように、ある時代、テーマについて、多くの関連文献を読み、さらにゼミ生と先生を交えて議論をしていくというゼミのスタイルは、多角的な視野を備えさせ、今後の人生においてもおおいに役立つスキルになっていくことと思います。

もう一つ、別の角度からメリットを紹介します。

皆さんもこれまで、耳にタコができるほど「復習」の大切さを教わってきたと思います。それでもなかなか毎日の講義の復習なんてできるものではありませんよね。しかし、復習すれば記憶として定着することは脳科学的にも明らかです。このゼミでは、同時代、同テーマをあらゆる視点を用いて復習しながら進んでいきます。したがって、記憶の定着が起りやすいです。

さらに、冒頭にお話した「文献購読の量」の問題も、実はこの復習によってその時代の

雰囲気や考え方が定着していくので、後になればなるほどそれほど辛くなくなっていくます。もちろん、後になればなるほど文献の難易度も上がっていくので、実感としてはあまり感じないかもしれませんが、辛さが変わらないということはそれだけ成長している証とも言えるでしょう。

4.おわりに

ゼミ選択はとても大事です。しかし、本当に大事なのは、ゼミで何をするか、何を得るか、だと思います。きっと熊谷ゼミに入れば、なにかを得て、成長できると思います。

この先、ほとんどの人がふたたび学生になることはないと思います。最後の学生生活も折り返し地点ですから、本分である「学び」を重視して選択してみてもよいのではないのでしょうか。

熊谷ゼミ一同、お待ちしております。